

よき群れより放たれ

バンドル・アード = ケナード

駒崎 優

Yu Komazaki

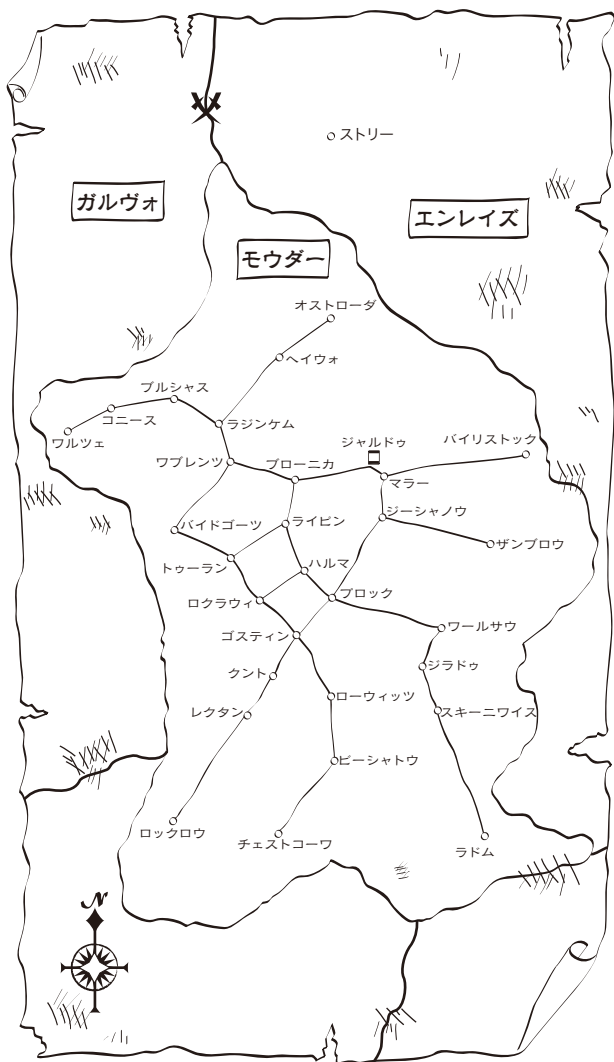
立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画
地図
平面惑星
ひたき



ジア・シャリース	バンダル・アード = ケナード隊長
ダルウィン	バンダル・アード = ケナード隊員
マドウ = アリ	同上
チェイス	同上
アランデイル	同上
メイスレイ	同上
ライル	同上
タッド	同上
ノール	同上
ハルド	同上
ナラック	同上
エルディル	バンダル・アード = ケナード一員

ブレンジ	エンレイズの伯爵。雇い主
ラフレイン	エンレイズ軍の司令官
グラナック	モウダー人の商人
オリカ	グラナックの娘
ルーバート	ブレンジの息子
レンナ	ルーバートの子守
リッドガーデ	ゴスティンに住む商人
クナリー	ゴスティンの大商人

1

空気の中に、春の匂いが混じり始めた。

野原には新しい緑が芽吹き、小さな花たちがつばみをほころばせている。日に日に暖かくなつていくこの野原で、アード^{バンダル・アード}ニケナード隊はのんびりと野営^{やえい}を楽しんでいた。傭兵^{ようへい}たちの黒い軍服は、のどかな風景にはまるでそぐわぬ不吉な染みのように見えたが、本人たちはまったく気にしていない。目と鼻^{はな}の先にクントの町があつて、必要なものは何でも揃^{そろ}う。町の宿には、バンダル・アードニケナードをまるごと収容出来るだけのベッドはなかったが、日が落ちた後も、火を焚^たけば野外で十分快適だ。それ以外の楽しみについては、金さえ払えば何でも惜しみなく提供される。

バンダル・アードニケナードの隊長シャリースは、春の太陽を浴びながら野営地の端に立っていた。青^せ灰色の目をした長身瘦軀^{そうぐ}の男で、日差しの中では小麦色の髪が金色を帯びる。顔立ちは粗削りながら整つており、傭兵隊長としてはまだ若かつた。

傍^{かたわ}らには、彼の幼馴染^{おきななじみ}で部下でもあるダルウインが立っている。シャリースとは対照的に小柄な男で、愛嬌^{あいきょう}のある青い目と人懐^{ひとなつ}こい笑顔には、誰もが好感を抱く。

彼らは、一人の農夫と相對してゐるところだった。農夫の背丈は、シャリースの顎^{あご}までしかない。しかしがっしりとした身体つきの男で、無精髭^{ぶしやうひげ}に覆^{おほ}われた顔をむつとりとしかめてゐる。ダルウインの陽気な挨拶^{あいさつ}を受けても、小さくうなずいただけでこりとしなかった。たとえ大剣をぶら下げた傭兵が相手であろうと、一步も引かぬという氣構えを見せようとしているのだ。

一方、シャリースのほうは機嫌が良かった。昨夜

はクントの宿に一部屋を確保し、心ゆくまで熱い風呂に浸^つつて、虫のいないベッドでぐつぐつと眠ったのだ。宿の女主人に金を弾^{はす}んだお陰で、着ていた軍服も綺麗^{きれい}に洗濯されている。これほどまでに自分が清潔だと言い切れるようになったのは久しぶりで、彼はこの気分を維持していたかった。だからこそ苦情を申し立てに來た農夫にも、穏やかに応対している。

「悪かった、言い訳のしようもないよ」

彼は農夫へ謝罪した。

「確かにあれは俺^{おおかみ}たちの狼だし、もつと気を付けておくべきだった。責任は取るよ」

問題になっているのは、バンダル・アード・ケナードの一員である、白い雌^{めす}狼である。

エルデイルという名のこの狼は、まだ子狼だった頃、何故^{なぜ}か傭兵の一人を母親だと思い込み、その後についてきた。以来、バンダルを自分の群れと見^みなして行動を共にしている。いざとなれば誰^{だれ}よりも勇

敢^{かん}に戦い、群れを守る忠実な狼を、傭兵たちは頼りにしていた。

そのエルデイルが、今朝、一匹の子ヤギを平^{たい}らげてしまった。

それが、この農夫の所有する家畜だったのである。放牧地からさまよい出てうろついていたところを、エルデイルに見つかつたのだ。エルデイルにとつてははぐれた子ヤギなど、遊び半分に仕留められる簡単な獲^え物だ。そして彼女は、誰にも見咎^{みとが}められぬまま、新鮮な肉を腹一杯に詰め込んだのである。

この一件については、シャリースもダルウィンも、しらを切るわけにはいかなかった。何しろ今まさに彼らの足元で、エルデイルが顔を血で赤く染め、満足げに舌なめずりしながら寝そべっているのだ。長々と伸ばされた前足の脇には、子ヤギの残骸^{ざんがい}が転がっている。シャリースが命じればエルデイルはその食べ残しを譲ったかもしれないが、農夫がそれで喜ぶはずもない。

「弁償はする」

シャリースは交渉に掛かった。

「だがあの子ヤギが囲いの外に出てたってことは、認めてもらわないとな。うちの狼が見つける前に、野良犬や、でなければ腹を空かせた流れ者の胃袋に入ってたかもしれない。その場合、あんたは誰からもヤギの代金を払ってもらえなかった」

「……まあ、そうだな」

農夫は認めた。仏頂面に、微かな戸惑いが宿る。威圧的な黒服を纏った傭兵隊長を相手に、恫喝も暴力も抜きですんなり値段の交渉が始められたことに、少しばかり面食らったようだった。

シャリースは子ヤギの残骸を指した。

「それに、あれは雄だ。どうせ、もう少し大きくなったら肉として売るつもりだったんだろう？」

「まあな」

「あんたが市場であの子ヤギを売ったとしたら、幾らで売れた？」

考え込む顔つきで、農夫が唇を舐める。

「……七エルギード」

その値段を口にした瞬間、農夫は窺うような目で傭兵隊長をちらりと見やった。二人の傭兵は顔を見合わせた。ダルウインが農夫へ、にやりと笑ってみせる。

「今の付け値は、聞かなかったことにしとくよ」

ダルウインの言葉に農夫が眉を上げ、口を開きかける。だが小柄な傭兵は、それを片手で押し留めた。「怒ったふりをする前に、ちょっと聞いてくれ。今はこんななりして人を殺して回ってるが、俺たちは元々農場の生まれだね。ガキの頃から家畜の世話の手伝いをして、売り買いの様子も見てきた。だから生まれて一週間かそこの雄の子ヤギが、幾らで取り引きされているかも大体判ってる。そいつを頭に叩き込んでから、もう一度、値をつけてみてくれ」傭兵たちの見守る中、農夫がごくりと唾を飲み込んだ。しばし迷った後、唸るように言う。

「――二エルギード」

一步も引かぬという態度たいどを示そうとしていたが、その表情には僅かな躊躇ためらいがある。

「強気だな」

シャリースは苦笑した。

「だが、今回はそれで手を打とう。本当はもうちょっとと値切りたいところだが、俺も今は、家畜の売買で生計を立ててるわけじゃない」

取り引きは成立し、農夫は二枚の銀貨を受け取って引き下がった。

人間たちのやり取りには何の興味も示さず、エルデイルは、柔らかな草の上で眠ってしまっている。いつの間にかやって来ていたチェイスが、爪先つまさきで子ヤギの死骸を突ついていた。バンダルの中では最年少で、二十歳を過ぎたばかりの若者だ。そばかすの浮かんだ少年のような顔には、落胆らくたんの色が浮かんでいる。

「殆ど全部食っちゃってる。皮の中は空っぽだ」

もちろんチェイスは、エルデイルの残り物であろうと、喜んで譲り受けるつもりだったのだ。もう食べざかりの年頃は過ぎていくはずだというのに、彼の食欲は一向に衰える気配がない。

「子ヤギが食いたかったら、あそこに行つて盗んで来い」

農夫が去った方向を指しながら、ダルウィンがけしかける。

「シャリースが今、一匹と三分の一くらいの金を払った。子ヤギの足一本くらい食っちゃっても、向こうに損はないだろ」

「やめろ、チェイスが本気にするぞ」

シャリースは幼馴染の肩を小突いた。そして若い部下にも釘を刺す。

「これ以上、モウダー人といざこざを起こすのはごめんだ。食い物は真つ当な方法で買うんだ、いいな？ 肉が食いたいのなら、町の肉屋に行け」

「いつまでここにいろんすか？」

未練ありげな眼差しを子ヤギの残骸に向けながら、
チェイスが問う。

「子ヤギ一頭分の肉を買ったら、何日くらいもつか
な？」

チェイスは明らかに、エルデイルを羨んでいる。

丸ごと一頭の子ヤギの肉を一人で食べるという考え
に取りつかれたのだ。

「おまえなら、一日で食い尽くせるだろうさ」

ダルウィンが請け合う。

「だが新しい肉を買う前に、俺ならまずこの子ヤギ
の残りを有効活用することを勧めるね。きれいに皮
を剥いででかい鍋で煮れば、結構いいスープになる
ぜ」

「少なくともあと二日は、ここにいることになつて
る」

シャリースは顎で、子ヤギの死骸を指した。

「これをじっくり煮てみたいか、チェイス？ それ
だけの時間はあるよな。だがこれは俺が金を払って

買い取ったヤギで、俺に権利がある。おまえに五十
コペラスで売ってやるよ」

「冗談でしょう？」

チェイスはそれを鼻であしらった。バンダル・ア
ード・ケナードにおいては、隊長は必ずしも、部下
に恐れられる存在ではないのだ。

「こんな骨と皮に五十？ せいぜい五コペラスがい
いとこつすよ」

「俺がこいつの皮を剥いで、うまいこと煮てやる
よ」

ダルウィンが申し出る。

「その手数料として、二十コペラスもらおうか」

彼の料理の腕前がバンダルであることは、自他
共に認める事実だ。それどころか、傭兵よりも料理
人として身を立てた方が成功するのではないかとい
う評価を与えられたことさえある。だが普段は、自
分の鍋一つ分の量しか調理しないため、それがチェ
イスの口に入ることは滅多にない。チェイスは

この提案に大いに心そそられたようだった。

わざとらしく眉を寄せて、シャリースはチェイスの注意を引いた。

「それは、ヤギの値段とはまた別の話だからな」

彼らはそれから、細かい値段交渉に時間を掛けた。暇はあるのだ。彼らは待機中だった。雇い主は決まっているが、まだここには到着していない。知らされているところによると、雇い主がクントに着くのは明後日の予定である。

最終的に、シャリースは七コペラス、ダルウインは十三コペラスを受け取り、チェイスはヤギのスープにありつけることとなった。

二日後の昼、紺色の軍服を着た若者が、バンダル・アード・ケナードの野営地に、隊長宛の伝言を運んできた。

生憎シャリースはその場にいなかったが、ダルウ

インは自分の火の前に座り、昼食の後片付けをしていた。

「あつちにいる。川縁だ」

ダルウインは指差して教えてやった。

「髭を剃りに行くと言ってた」

兵士はシャリースを捜しに行き、ダルウインは作業の手を速めた。正規軍の兵士がシャリースへの伝言を持ってきたということは、すぐにも移動命令が下されるかもしれない。

少し前、エンレイズ軍の一隊が、クントの町に到着したことは、既に耳に入っていた。

バンダル・アード・ケナードの面々は町の東側にいたが、雇い主の一行が北から近付きつつあるのは、半日前から知っていた。町を通り抜けて街道を進む人々が、道端の野原で野営していた彼らに、軍の動向についての噂をあれこれと教えてくれるのだ。その話によると、エンレイズ軍は荷物を満載した荷車を幾つも引いて、ゆっくり慎重に進んでいたらしい。

「ようやくのお出ましたな」

隣にいた仲間が話し掛けてくる。ダルウインはうなずき、磨き^{みが}終えた鍋を点検した。

「今日着くつて、手紙に書いてあったからな。これも、荷造りしとくか——」

そのとき、三台の荷車と十数人の人間からなる商隊が、クントの町から列を作つて出発して行くのが見えた。

しかし先頭を進んでいた荷車が、不意にがくんと傾いてしまう。どうやら車輪に故障^{こしょう}が発生したらしい。

傭兵たちの間からは驚きの声が続つか上がつたが、当の商隊からは、乱暴な罵^{のの}り声^{こゑ}が聞こえてきた。壊れた荷車の御者は道へ飛び降り、周囲を歩いていた仲間の商人たちが荷車を取り囲む。彼らは車輪を調べ、手慣れた様子で修理に取り掛かった。荷車はいかにも重たげだったが、商人たちは手際良く梃子^{てこ}を使っている。

「あれには一体何を積んでるんだろうな？ 岩の塊^{かたまり}か？」

ダルウインが楽しげに言う。

「いや、もしかしたら、御者の女房かもよ」

近くにいた者がそう考察してみせる。

修理は実に整然と進められた。野営していた傭兵たちは感心しながら、その様子を見物した。町から町へ商品を運ぶことを生業^{なりわい}とする商人たちは、荷車の修理にかけては熟練した職人でもあるのだ。

手の空^あいている商隊の面々は、周辺をぶらついていた。この一行は幾つかの家族で構成されているらしい。中には、乳飲み子を抱えた女や、荷車から溢^{あふ}れ出た子供たちを叱^{しか}り飛ばす母親もいる。荷車が停まるや外に飛び出た数人の子供は、野原ではしゃぎ回っている。何しろ動けなくなつた荷車が道を塞^{ふさ}いでいるのだ。修理が終わるまで後続の荷車は身動きが取れず、彼らもそれを心得ている。

一人の女が、息子^{おほ}と思しき少年の手を引いて、傭

兵たちのところへ歩いてきた。

少年は四、五歳くらいに見えた。気のなさそうな態度で女の手に握つかまっている。巻き毛に縁取ふちどられた丸い顔は可愛らしいが、今はふくれっ面だ。しかしそれも、傭兵たちの中に白い獣けものを見つけるまでのことだった。

少年は、草の中に腹ばいになった大きな狼に釘付けとなった。手を引かれるまま歩きながらも、目を丸くしてエルデイルを見つめている。一方、エルデイルのほうには少年には見向きもしない。母親だと信じている傭兵の足元で、身体を伸ばして寛くつろいでいる。女は真つ直ぐにダルウインの元へやってきた。その目には値踏みするような色があつたが、ダルウインの人の良さそうな目に迎えられて、警戒心けいかいしんを解いたらしい。

「ちよつと」

少年の手をぐいと引いて、彼女はダルウインのほうへと押し出した。

「この子を頼んでいい？」

「ああ、いいよ」

ダルウインは気軽に引き受けた。女が用を足す間、子供を見ていることくらい何でもない。

女は子供の巻き毛を乱暴に撫なでつけたが、子供はエルデイルに夢中で気付きもしない様子だった。好奇心と恐怖に、大きな茶色の目は輝いている。

女は背を向け、急ぎ足で草地を突っ切って行った。子供はしばらくその後ろ姿を見ていたが、ダルウインに促うながされると、物判りよく彼の横に座った。

「あんたの隠し子か？」

側そばで見えていたアランデイルがにやりと笑う。

「やるじゃないか、ダルウイン」

ダルウインはそれを鼻であしらった。

「自分のところに来なくて、ほっとしたんだろう、アランデイル」

意地の悪い忍び笑いが、そここで起こった。もしいつの日か、赤ん坊を抱いた女がやってきて、父

親としての責任を取れと迫るとすれば、その相手はアランデイルだろうというのが、大方の見方だ。アランデイルは美男で、漁色家だ。普段の所業を見るに、どこに子供がいても不思議ではないが、今のところ彼に子供を押し付けに來た女はいない。

ともあれ子供は大人しくしており、彼らはそれぞれ荷物の整理をしながら、母親の戻りを待った。

一方、伝令の兵士は、バンダル・アード・ケナーの隊長を捜して野営地を横切り、道から大分外れた小川に辿り着いた。

シャリースはちょうど、髭を剃り終えようとしているところだった。エンレイズ軍到着の情報を耳にし、雇い主からの呼び出しが掛かると踏んで、身支度を整えることにしたのだ。その読みは、どうやら見事当たっていたようだ。

「ブレンジ司令官からの伝言です」

生真面目そうな若い兵士はそう宣言してから、あやふやな目つきでシャリースを見やった。上着を脱

ぎ去り、顔に石鹼の泡を付けたままのこの若い男が、有名な傭兵隊を束ねる男かどうか、確信が持てなかったようだ。

「ええ、と——あなたがバンダル・アード・ケナーの隊長ですか？」

シャリースのほうは、他人のそんな反応に慣れている。

「そうだ」

彼は剃刀かみそりを持つ手を止めて、相手を見やった。上官からの伝言を正確に思い出すために、兵士は一呼吸を費やした。

「直ちに司令官の元へ出頭せよとのこと。『黄金の鐘』亭という宿です。バンダルには、いつでも出発出来るよう準備を整えておくようにとのご命令です」

「判った」

シャリースはうなずいた。川の流れて剃刀を洗いながら、去っていく兵士の後ろ姿を見送る。たむろ

していた傭兵たちが、新しい情報を聞き出そうと若い兵士をお喋りに誘ったが、兵士は乗る素振りすら見せず、真つ直ぐ町へと戻って行く。ごろつきの傭兵と余計な口はきくなど、上から言い含められてきたのかもしれない。

ブレンジ伯爵は、当初の予定通り動いている。バンドルにとって、これはありがたいことだ。伯爵の称号を持つこの司令官とは、まだ手紙のやり取りをしただけで、面識はなかった。扱いやすい雇い主であれば、それに越したことはない。

バンドル・アード・ケナードを雇おうとする者の中には、到底不可能な移動や、怪物並みの働きを要求する輩もある。シャリースは馬鹿げた要求を幾度となく一蹴してきたが、少なくともブレンジに対しては、その必要はなかった。お陰でバンドル・アード・ケナードはたつぷりと休息を取ることが出来たばかりか、待機中の拘束料も受け取れることになつてゐる。

シャリースは剃刀を片付け、ダルウィンが自分の火を焚いている場所へと戻った。ダルウィンは草の上に胡坐を掻き、自分の鍋を布で丁寧に包んでいる。その隣に見知らぬ少年が座っているのに目を止め、シャリースは片眉を上げた。

「誰だ、その子は」

少年は顔を上げたが、気後れたように黙ったまま。内気な子らしい。ダルウィンの背中へと身を寄せる。

「あそこで難渋している連中の仲間だ」

ダルウィンが片手で、荷車の修理に追われる商隊を指し示す。

「連れのご婦人は、草むらに隠れてやらなきやらない用事があるらしくてね。その間ちよつと預かることにした。あの伝令は、何だつて？」

目線で、兵士が去った方角を指す。シャリースは肩をすくめた。

「司令官殿にお目通りが許されるとき。雇い主と顔

を合わせるついでに、買い出しに行っておきたい」

子供はダルウィンにくつついて大人しくしており、問題になることはなさそうだった。シャリースは部下たちを見渡し、一つの顔を探した。

「マドウ・アリ」

呼ぶと、部下の一人が顔を上げ、立ち上がる。それと同時に、白い狼も身体を起こした。子供の目がますます大きくなったのは、狼が近付いてきたからだけではない。

マドウ・アリは遠い異国の出だ。この辺りでは見ることもない浅黒い肌に鮮やかな緑色の目が光り、その顔の左半分は黒い刺青に覆われている。その姿を目にしてぎょっとしたのは、この少年が初めてではない。だがマドウ・アリは、少年に視線を向けることさえしなかった。

エルデイルが何故、この男を自分の母親と思い定めたのかは誰にも判らない。もしかすると野生動物の嗅覚が、優れた戦士の匂いを嗅ぎ取ったのかも

しれない。ともあれ、彼らはバンダル・アード・ケナード最強の一对として知られている。

「俺は雇い主に会いに行く」

シャリースは説明した。

「おまえにも一緒に来てもらいたい。護衛として、箔付けにな」

正規軍の兵士の間でも、マドウ・アリのことは知れ渡っている。顔に刺青のある異国の男に喧嘩を売った男たちが、いかに悲惨な末路を迎えたかについての噂だ。それらの噂には事実でない物語や、馬鹿馬鹿しいまでに誇張された部分もあったが、バンダルの仲間たちは敢えてそれを否定しなかった。今やマドウ・アリは兵士たちから畏怖される存在となっている。他人と親しく交わる術を知らないマドウ・アリにとっては、下手に近付かれるよりも避けられているほうが楽なのだ。

そしてそのマドウ・アリを連れて行くことで、傭兵隊長としては若いシャリースも、正規軍兵士から

一目置かれる存在になれる。シャリースの顔を知らない兵士たちも、マドウ・アリを見誤ることはない。だが、有名な白い狼のほうは、一緒に連れて行くわけにはいかない。

「おまえは留守番だ、エルデイル」

自分の名前を聞きつけ、エルデイルが期待に満ちた眼差しでシャリースを見上げる。一心に見つめれば、相手と思うがままに操れると考えているようだ。シャリースは片手でそれを撥ねつけた。

「ここで待つてろ。おまえはもう、悪評が立っちゃまったからな」

エルデイルの目に不満が宿る。

「伏せろ」

しかしマドウ・アリの静かな命令には、狼はただちに従った。エルデイルが最大の敬意を払う相手は、シャリースではなくマドウ・アリなのだ。

「肉を買ってきてやるよ」

シャリースは狼に約束した。

「だからもう、迷子の家畜に手を出すなよ」

エルデイルは不承不承ふしょうぶしょうといった顔で、前足に顎を乗せた。

マドウ・アリを連れて、シャリースはクントの町の門へ向かった。通りすがりに、道を塞いでいる商隊を横目に眺める。新しい車輪が取り付けられて、荷車は間もなく出発出来そうだ。

クントの町の広場には、エンレイズ軍の紺色の軍服が溢れ返っていた。

到着したばかりの兵士たちだ。皆薄汚れて、疲れた様子だったが、町で休息が取れることにほっとしている。酒を売る店には人だかりが出来ていた。如才じょうさいないクントの商人たちが食べ物かめの籠やエールの甕かめを運び出し、広場のそこで商売を始めている。

黒衣に濃緑色のマントを着けた二人の傭兵が広場を横切って行く様は、正規軍の兵士たちの好奇の視線を集めた。

注目の的はもちろんマドウ・アリだ。だがブレ

ンジ司令官がバンダルを雇ったことは知られていないらしく、兵士たちは、二人の傭兵に道を空けた。中にはシャリースも見知った顔が幾つか混じっており、片手を挙げて挨拶してきた者もいた。

シャリースはそれに手を振り返し、しかし足は止めずに『黄金の鐘』亭へ向かった。広場に面した、大きな宿だ。最上階である三階には、町で最も快適な部屋があることを、シャリースは知っている。この町に着いた日、町の住民がその部屋について教えてくれたのだ。生憎彼が気軽に泊まれるような値段ではなかったが、お陰で宿の場所を覚えていた。

歩きながらその部屋を見上げると、一つの顔が窓から彼を見下ろしていた。紺色の軍服を纏った男だ。傭兵隊長と目が合うと、彼は小さくうなずいてみせた。その男こそが、バンダル・アード・ケナードの雇い主らしい。

宿の入口には警護の兵士が立っていたが、バンダル・アード・ケナードの軍服を着た二人は、誰何^{すいか}な

しに中へと通された。

階段を上がって三階まで行く間に、忙しげに下りてくる兵士とすれ違い、また、慌て^{あわ}て駆け上がって行く兵士に追い越される。町に着いたばかりだというのに、ブレンジは休息を取らないようだ。

部屋を守っていた兵士が、傭兵たちを司令官に取り次いだ。シャリースがマドウ・アリを従えたまま部屋に入ると、窓辺に立っていた男が振り返る。

初めて顔を合わせたブレンジ伯爵は、四十がらみの小柄な男だった。しかし身体にびつたりと合った仕立てのいい軍服が、彼を實際よりも大きく見せている。小さくきれいな手は、剣を振るったことなど一度もなさそうだった。彼の仕事は軍の物資を滞^{とどま}りなく運ぶことであり、戦場で軍功を上げることではないのだ。顔つきは優しげだが、いかにも悩み事を抱えているといった風情だ。

長身の傭兵隊長とその異国出身の部下を、ブレンジは疲れた笑みで迎えた。彼らの姿に威圧されたの

だとしても、その気配は微塵^{みじん}も感じさせない。

上げかけた悲鳴を押し殺し、身体を強張^{こわば}らせたのは、同じ部屋にいたもう一人の男のほうだった。

その男は部屋の奥に立っていた。普通ならば司令官の副官がいるべき場所だが、彼は軍服を着ていない。腹回りの太い初老の男で、額は禿^はげ上がり、後頭部に辛^{かう}うじて、淡い色の巻き毛が残っている。金のかかった平服を纏っており、エンレイズ軍に属しているようには見えなかった。裕福な商人のようだが、居間にいたのはブレンジとこの男だけだった。

シャリースは興味深く、この平服の男を観察した。傭兵隊長が雇い主の司令官と初めて対面する場には、いかにもふさわしくない存在に思えたのだ。しかし相手は、精一杯さりげなさを装っているような素振りで傭兵たちに横顔を向けた。二人の傭兵など存在していないというように、窓の外を眺める。

「君がシャリースだな？」

ブレンジが口を開いた。小柄な身体の割には太い

声だ。

「私がブレンジだ。座ってくれ」

丸いテーブルに、二脚の椅子が寄せてある。シャリースは示された椅子に腰を下ろし、その向かいにブレンジが掛けた。マドウ・アリは扉の側に、影のように佇^{たたず}んでいる。

マドウ・アリへちらりと視線を投げてから、ブレンジは傭兵隊長へと目を戻した。余計な前置きは一切抜きで話し始める。

「先週の初めのことだ。レクタン近郊に向かっていた私の配下の輸送隊が襲われ、積んでいた食料を荷車ごと奪われた」

「ああ、その話は聞いた」

窓辺の男を観察しながら、シャリースはうなずいた。

「運んだた連中が死体で見つかったってな。犯人がもう捕まったかどうかは知らないが」

平服の男は相変わず窓から見える景色に気を取

られている振りをしている。しかし全身を耳にして話を聞いているのは確かだ。

「犯人が何者かは未だに判っていない」

ブレンジの声に苦いものが混じる。

「ガルヴォ軍が潜伏していたのかもしれないし、元の盗賊が徒党を組んだのかもしれない。犯人の追及は私の仕事ではない。だがとにかくレクタンの北西にいる友軍に、代わりの食料を届けなければならぬ」

「なるほど」

シャリースは雇い主へ視線を戻した。ブレンジは手紙で、バンダル・アード・ケナードが輸送隊に行することを要請してきた。詳細については書かれていなかったが、シャリースにも相手を責める気はない。どんな雇い主でも、傭兵たちに振りかかる危険の全てを、予め知らせたりはしないものだ。

「俺たちはその護衛を仰せつかったわけだ。途中には、先週の襲撃で味を占めた奴らが待ち伏せしてい

るかもしれない——輸送隊に付いていたエンレイズ軍の兵士を、あつさり皆殺しにしてのけた奴らが」

「実はそれから、少し事情が変わった」

暗い面持ちで、ブレンジは言葉を継いだ。

「危険の程度を知りたいと考えて、三日前に、先遣隊として十人を現地に送ったのだ。昨日には我々と合流するはずだったが、まだ戻ってきていない」

シャリースは椅子の背に寄りかかり、目を眇めて雇い主を見やった。

「行方不明ってことか？ それとも、そいつらも死体で見つかったのか？」

「……今のところは、行方不明だ」

ブレンジは傭兵隊長の反応を窺っているようだった。どうやらここで仕事を断られることを恐れているらしい。

だがその程度の話で怖気づくほど、シャリースも初心ではない。ブレンジに向かって、にやりと笑いかけてやる。

テーブルの上で、ブレンジは両手の指を固く握り合わせていた。

「……彼らが全員殺されてしまったということが有り得るだろうか？」

今、彼が眉間に深い皺を刻んでいる理由は、この一件なのだ。シャリースは肩をすくめた。

「有り得るか否かという御質問なら、俺としては、有り得ると答えるしかないな」

ブレンジは絶望的な顔になったが、シャリースは構わず先を続ける。

「もっとも、別の可能性だって十分考えられる。もしかしたら、道に迷ってうろろしているのかもしれない。或いは途中で飲んだくれているのかな。全員が示し合わせて脱走したというのも、有り得る話だ」

「けしからん」

苛立たしげな低い呟きは、窓辺に立っていた男から発せられた。その言い方からは、けしからぬのは

脱走なのか、それともそんな考えをブレンジに吹き込むシャリースなのか、判然としない。

シャリースは改めて、平服の男を見やった。まるで道徳の教師のような口をきくこの男は一体何者なのだろうかと言ふ。

聞こえていないわけはなかったが、ブレンジは男の呟きを聞き流した。シャリースが男に向けた視線も黙殺し、もちろん今更、互いを紹介しようともしない。平服の男はこの部屋にはいない、というのが、どうやら暗黙の了解となっているようだ。

「……率直に言うが」

シャリースに視線を据えたまま、ブレンジは身を乗り出した。

「既に部下と糧食を失っている。私がここまで運んできたのは、レクタン周辺を守るために是非とも必要な食べ物だ。それを運ぶために、余計な危険を冒したくないと思っている。つまり……」

言葉尻は消えたが、シャリースは続く言葉を読み

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。